

AIは医療の何を変えるか



株式会社エムネス
島村泰輝

結論

AIが好きかという問いに対しては、好きでも嫌いでもないという答えになる。AIはあくまでも道具である。ただ、万年筆はこのメーカーの書き心地が好き、というようにAIも愛用したいものはある。使う目的によってAIのチューニングをし、使いながら自らの必要とする形にアップデートしていくものになることが想定される。使えば使うほど自分の手になじんでいくことで、道具として成熟し、他を使うことは考えられないという感覚になりそうである。

また、AIを作成する行為そのものが、ベンダーのみの特権ではなくなりつつある。私が学生の頃、同級生のみならず医学部全体で見てもプログラミングができるものは非常に少なかったが、今の学生はプログラミングができるものが1学年に数名おり、なかにはアプリケーション作

成のみならず機械学習に精通し、KaggleやAtCoderと言ったコンペに入賞する者まで現れている。学生が大学の医師に協力を要請されて論文作成に携わっているものもある。課題を自分で設定し、欲しいアプリを自前で作るような時代になっている。開発環境もGoogle Colaboratoryの出現で極めて安価になった。必要なのはそのアプリを動かすプラットフォームである。

読影現場の課題は、AIでどれほど解決できるか

2016年のAIブームの時は万能なAIが何もかもを解決すると思われ、放射線科医はもはや必要なしと考えられるまで至った。

2022年現在、実態はどうだろうか。そのようなAIは残念ながら見当たらない。

しかし各社様々なアプリケーションをリリースしている。特定の疾患に対する読影をサポートするAIだけではない。ワ

ークフローを再定義するアプリケーションが出始めている。撮影した瞬間にバックグラウンドであらかじめAIチェックをかけておき、特定の疾患がありそうな症例を読影リストで知らせてくれるものもある。

放射線科業務を含む医療に関わるすべての人にとって、それぞれの本質的な仕事はなにか。その仕事に向き合う時間を、それ以外の仕事でどれだけとっているのか。それぞれの医療者が実現したい医療に向けて、本質的な仕事以外にかかる時間を減らすようなAIは必要とされる。放射線科医にとっては、他診療科の医師との関わり方は変わっていくであろう。レポートを作成することが仕事、ではなくなるかもしれない。

画像診断AIの現状

ある特定の疾患に対して存在するかし